

忘家の人々 日影丈吉



徳間文庫



おう け ひとびと
応家の人々

© 1982 Jôkichi Hikage Printed in Japan

126-3

1982年8月15日 初刷

著 者 日 影 丈 吉
ひ かげ じょう きち

発 行 者 徳 間 康 快
とく ま やす よし

東京都港区新橋四一〇丁一〇五
株 式 有 限 公 司
発 行 所 会 社 徳 間 書 店

電 話 (〇三) 四三三・六二三一 (大代)
振 替 東京四一四四三九二番

印 刷 凸 版 印 刷 株 式 有 限 公 司
製 本

編集担当 橋本昭二

ISBN4-19-567339-9 (乱丁、落丁本はお取りかえいたします)

応 家 の 人 々

目次

序章	白い線	5
第一章	黄色い眼	16
第二章	赤い花簪 ホエサム	32
第三章	黒い喪服	53
第四章	桃色の家	82
第五章	金色の果実	96
第六章	青い鞋 くつ	115
第七章	銀色の紙銭	136
第八章	緑の獅子	150
第九章	紫の叢生	168
第十章	灰色の思索	186
終章	色のない別れ	214
解説	須永朝彦	217

序章 白い線

秋風が立ちはじめ、その底に、まだ暑熱がわだかまっているような季節になると、きまって北回歸線の通っている地方を思いだす。苦しい、心をさいなまれる、だが時には多少の喜びもあった、思い出ではあるが、もう感情的な色あいはいはうすれてしまい、胸を焼く郷愁のようなものだけが残っているのである。

そのせいか、ある集会の通知状を受けとると、めずらしく行ってみる気になった。人間関係のいやらしさが稀薄になり、その風土に関するものなら、なんでも懐しくなるほど、記憶が醗酵していたのかも知れないが、通知状に並んでいた発起人の顔ぶれに興味を引かれた。

ある男が、東南アのある国に、顧問として招聘された。私も一面識のある古い顔だ。会はその男のための、うちわの壮行会で、場所は外苑のそばにある古ぼけた会館であった。

会場には、第〇方面軍總司令部にいた某將軍も顔を見せていた。かれが主賓のとなりに坐って、皮肉まじりに僚友の思い出ばなしをやっているのを、私はちらと聞いた。終戦の大詔がくだってから二月ぐらいたって、降伏の手続きが完了してから自殺した、長官のうわさである。

老將軍は中風で唇の片はしが吊っていて、そうでなくても皮肉な表情に見えたが、かれの幕僚の

参謀だった主賓は、病氣を押して出席してくれた旧上官に、すっかり感激したようすで、しきりに便所に立つ老人の、起居や歩行を助けようと勤勉にふるまっていた。それが美しいながめというよりも、過去の猿芝居を見せつけられている感じで、苦笑させられた。

自決した長官の、立派な風貌を、私も思いだしていた。降伏決定の日まで、かれのために広壮な地下住宅を掘るハッパの音が、ひびいていた。急造の地下壕にも玄関があり、赤い絨毯が敷いてあった。そこでいっしょに暮らしていた美しい二号。彼女がいつも抱いていた、おかしな顔のプードル犬——むしむしした会場に集まった、過去の人たちを見わたしながら、長官が自決したのは、適当な処置だったという感じが強くしたのである。

冷房の設備のない古めかしい建物が、耐えられない季節を過ぎていたのは、まだよかったが、私はすぐに、ここへ来たことを後悔していた。いいかげんのところで席をはずし、暮れきった戸外に出ると、会館の窓の洩れ灯で、ところどころ夜露に光っている芝生の上を、木の間をぬけて道路に出た。と、小走りにあとを追って来た者があった。

「久我くん、久我くん」

その声を聞くと、私はぞっとした。が、立ちどまって、しかたなく、小柄な男の口髭の白くなつた顔が、ちかづくのを待った。あまり歓迎したくない男だった。

かれが会場にいたことには、私も気がついてしたが、口をきく気はしなかったのだ。が、相手も私に注目していたとみえ、からのグラスの並んだ卓を残り惜しそうに囲んでいる老人達の中から、私がそっと席を立ったのを見つけると、何のためか、かれもすぐに立って来たとみえる。並んで歩

きながら、かれはいった。

「あの男は上の部だよ」

当日の主賓のことを、いつているらしかった。

「ほかの連中はほとんど、立ちあがる気力もなくしてしまつとる。だらしない」

酔っているらしく、男は肩を張って、いった。

「安土^{あづち}さんは、ごさかなようですね」

「わしかね。いやあ、もうだめだよ——だが、現状がどうなるか、見届けずには死ねない気持だね。敵性国の手先のような真似をやって、よろこんどる若者たちを見たまえ。何故、こんな国になつてしまつたのかね」

慨嘆する安土が、こりずに最後のご奉公を考えているのか、それともただのツケ元気だけなのか、私には判断ができなかった。だが、きれもので通っていた頃の、小粒だが鋼鉄でできた玩具の戦車のように精力的だった、この男にくらべれば、その晩の安土には、さすがに年齢から来るあわれっぽさが目立った。

「久我くん。よかったら、一時間ばかり、わしにつきあってくれんかね。話したいこともあるんだ」

安土は大通りに出ると、ふいにいいだし、枯れた腕を振って、タクシーを止めた。むかし、かれの命令で動かされた関係もあって、面とむかうと、そう素気なくもできなかった。結局、私は見附の近くにあるビルの地階の、キャバレーに連れて行かれた。

そこからあまり遠くないところに、旧郷軍関係ごうぐんの事務所があつて、安土たちは気分きぶんの若返りに、ときたまそこへ来るのだといったが、なるほど地階の入口には煽情的なフロア・ショーの舞台写真を貼ったケースがあり、「中国美人歌手・呉馨芳特別出演」と書いた立看板が出ていた。絨毯を敷いた階段を下りて行くと、思ったより品のよい造りのホールがあつた。

ハイボールを半分も飲まないうちに、ショーの一部がはじまつたが、長衫ツンサアを着た若い歌手も、思いがけないほど綺麗で、声も美しく歌いぶりも可憐だつた。彼女がバンドの並んでいる台を降りて、私達の卓の近くまで来ると、私の老いたる連れは、飲みほしたコップを招くようにさしだし、彼女のためにビールをついでやった。こんな安土を見たのは、はじめてであつた。

外地の上級将校は、できる範囲でしたい放題のことをやったが、私は安土からしゃきしゃきした、厳格の標本のような印象しか受けていなかった。もつとも、安土の私生活も公生活も、そのころの私にはほとんどわからなかつた。かれは、いつも突然、私の前にあらわれ、辛辣しんちゅうな調子ですこし喋るだけだつたからだ。

私はかれと命令の授受のために、いつもごく短い時間、会うだけで、ふだん、かれがどこで何をしているか、ちつとも知らなかつた。かれの指定して来た場所に行けば、必ずそこに、かれがいたが、もし私が会見の場所を出てから、もう一度その扉をあけてみたとすれば、かれの姿はもう消え失せていたことだろう。そんなナゾの人物の印象が残っていたし、そのころ当然かれに対して抱いていた多少の恐怖感も、私はまだ忘れていなかった。

そればかりか私はそのころ、かれの不愉快な、個性の強い無表情な顔は、巧妙にできた仮面では

ないかと疑ったことさえある。安土が仮面を使用していなかったことは、それから二十年後のその日やっとなつきとめられたくらいなのだ。でなかったら私は、背広姿の安土を壮行会の会場で、見分けられなかったはずだからだ。

安土という存在が私に、ふつうの人間らしく見えて来たのは、会館の玄関前の芝生から、このキヤバレーのテーブルにつくまでの、まだ、ほんの十分間たらずの経験に過ぎなかった。で、ビールを飲みほすために、あおのけた、可憐な中国娘のかわいい喉のあたりを、むさぼるように見あげている、この老人の横顔は私に、はなはだ奇異の感じを与えたのである。

若い歌手はそれからアンコールに答えて、また一曲うたった。今度は中国語の歌だった。いや福建語の歌詞を、ほんの一部分だが私もまだ、うろおぼえに覚えている、古い流行歌だった。

冒頭に書いたように、どんな気持で私はその日の会合に出たか——そして、どんなに見事に気持ちを裏切られ、逃げるように会場を出たか——ところが、ここで三転して、私がどんなに報われたような感動を以って、その歌を聞いたか——それがみな単純なひとつの心理から出ていることは、いうまでもない。私のような生涯の放浪者だけが知っている郷愁なのである。

歌が終わるまで、私は眼をつぶってメロディを追っていた。眼をあくと、安土の姿が見えなかった。意味のわからない単調な歌に退屈して、便所にも立ったのかと思ったが、安土はなかなか帰って来なかった。

フロア・ショーのストリップがはじまる時刻がちかづく、押しかけて来る客があるとみえ、外人や外人相手のセールスマンらしい客で、ホールはかなり混んで来た。人手が足りないのか、席に

いないほうが多くなった係りの女が、間を置いて私達の飲みぶりを監視に来た時には、安土が椅子を立ててから十分あまりもたっていたらうか。

「閣下、もうお帰りですか」

「ここの人達は安土の素姓をだいたい知っているらしく、その女がたずねた。

「いや、便所にでも行ったんじゃないかな。それにしても、ちよつと長すぎるが」

「おじいちゃんになると、おしっこ長くなるのね。探して来ましょうか」

「いや、いいよ。もう帰って来るだろう」

女が追加の注文をとって、急がしそうに行ってしまうと、私はなおしばらく、安土のいない椅子の上でしずかに回っているミラー・ボールを、ぼんやりながめていたが、すこし気になって来て、席を立った。安土は廊下にも便所にもいなかった。

自分の方で誘っておきながら、先に帰ってしまうわけもなし、まさか勘定を私に押しつける予定の行動だったはずもないから、事務所にでもはいりこんで、喋っているのだろうかと思い、私はその店にも倦きていたから、勘定をはらって先に帰るつもりになった。

待っていても、もう安土は、ふたたび私の前に姿をあらわさないだろう、という気がした。かつて、いつもそうだったからだ。そのころ私達はたぶん一時間以上、いっしょにいたことはなかったろう。別れば二度と私の方から、かれの姿を求めることはできなかったし、ゆるされなかった。

だが、いまはもう、そんな時代ではないのに気がつく、私は馬鹿にされたような気がして苦笑しながら、ホールに引返そうとした。廊下に面した小部屋のドアがあいて、さっきの歌手が顔を出

したのは、その時であつた。

「あなた、お願いあるの。ちょっと、いらしつて」

女はふいに、くせのある日本語でささやきかけ、私を手まねいた。もう長いあいだ若い女性から、あなたなどと呼ばれたことのない私は、面くらったまま、狭い楽屋にさそいこまれたかたちだったが、そこにも他に人影はなかった。ショーのつなぎのバンドが、ホールの隅で憂鬱なひびきを立てているのが、聞こえて来るだけであつた。

「おねがいよ。あたしを助けて。あたし狙われているの」

どぎついライトでない、ふつうの照明の中で、私はあらためて、この中国人の歌手を見なおした。見たところ、まだ二十歳を出たばかりの若い娘だった。

「わるい男にでも、ひっかかったのかね」

たぶん痴情沙汰かなにかだろうと思って、私はきいた。

「いいえ、そんなのとちがう。出入口を見張られてるの。おねがいだから、あたしを連れ出してね」

「あいてはギャングか、それとも警察かね」

娘はあいまいな顔で、にやりとした。私のいうことが、わからなかったようにも、また不敵な表情にもとれた。異国人の持つ多少の不可解さはあるが、アクション物のヒロインにしては可憐すぎる感じであつた。

彼女——入口の看板に出ていた呉馨芳という名は、本名かどうかわからないが——は、私に信頼

の微笑を見せて、壁の衣裳戸棚の前に行き、扉をあけて、手ばやく薄物のケープをとりだした。その時、私は異様な感じ——場ちがいな物がそこにあるという感じ——を受けたのだ。あるべからざる物を見た気がしたのである。

私は戸棚の前に進みよって、かるく女を押しつけた。両びらきの片方だけが、まだ閉めたままになって、いる蔭から、はみだしていたのは男の後頭部だった。それが私の眼についた異物の正体であった。一人の男が戸棚の中に、ひざを折ってもたれこんでいたのだ。がっくり、うつむいた顔を、のぞいて見るまでもなく、それは安土老人だった。

今度だけは、消えた安土のいどころを見つけたのであるから、私にとっては最初の経験であった。同時に私は、かれの結末を見ることにもなったのだ。安土は死んでいた。

「どうしたんだね、これは」

私は若い歌手のほうを振りむいて、吐息をもらした。と、女の手には、寸づまりのオートマチックがにぎられ、銃口が私を狙っているのに気がついた。女はいった。

「あなたは、その人の仲間じゃない。だから、あたしを助けてくれるわね」

「仲間じゃないけれども、今夜の連れなんだよ。その私に何故、たのむのかね」

「そのわけ、いずれわかるわ。いまは話しているヒマがないの」
うながすように、ちよつと銃口がうごいた。

「どうすれば、いいんだね」

女は片手につかんでいたケープを、投げてよこした。

「それをクロークに預けておいて。二、三分すると、ストリップの人たち、楽屋入りするわ。大き
わぎしながら、やって来るから、裏口の見張りは、そのほうに氣をとられる。その時、あたし、あ
なたの連れのような顔して、表から出るわ。うまくタイミング合わせてよ」

娘はにっこりして拳銃を手提てきひに落とした。その信賴にみちた微笑を見ると、私ははじめから彼女
の共犯者だったような錯覚におちいった。私は楽屋を出て、クロークに女のケープをあずけ、私達
のテーブルに帰って来て、受持ちの女を呼んだ。

あと一、二分で、楽屋入りしたストリップたちが屍体をみつけ、大きわぎが持ちあがる。中国
人の歌手ばかりでなく、安土の連れだった私も、だいいちに疑われることになるだろう。だが、私
は落ちついて勘定をはらうと、立ちあがってクロークへ行った。ケープを受けとると同時に、物か
げから出て来た呉馨芳が、私の腕に腕をからませた。

地上に出ると、彼女はあたりに眼もくれず、歩道に寄せて止めてあった大きな車の、運転席をあ
けた。どこかに監視する眼があるらしく、彼女の顔色から緊迫した状態が読まれはするのだが、そ
れにしても落ちついているのに感心させられた。私は彼女の何気ない風を見習うことにした。

左側にハンドルのついている外車に乗りこむと、彼女はいそいでイグニション・キーを入れ、周
囲の暗がりすばやく見すかし、スタートした。

車は無事にすべりだした。歩道に叫ぶ声も銃声も聞こえず、あとを追って来る車もなく、あっけ
ないくらいだった。私はかくしから煙草を出して、くわえた。

「あたしにも、ちょうだい」

呉馨芳がまだ緊張の消えない声で、いった。

「これから、どうするつもりだね」

ハンドルを握っている女に、煙草をくわえさせ、火をつけてやりながら、私はきいてみた。

「おまかせするわ。方向リードしてよ。あなたのおうちへ行くわ」

「私のところへ？」

「そう。かくまっていたわ」

気まぐれや冗談でないのは、馨芳のきまじめな表情でわかった。しかたがないので、私は煙草のけむりの中から、彼女の横顔を観察することにした。

この女は何故、安土を殺したのか。それとも安土を殺したのは、誰かほかの者だろうか。そして、彼女はほんとうに私を信頼しているのか。それとも、せっぱまって、からだを張っているのだろうか。

どっちみち、これから、どういうふうに発展するかは予想もつかなかった。安土が私を、あの地下のキャバレーに連れて行ったことにも、何か別の目的があったのかも知れなかった。そう考えると、その晩、私をおそった妙な事件が、偶然でないという気もして来た。

歌手呉馨芳が福建語でうたった「雨の夜の花」は、二十年前の台湾の流行歌だった。そのころ、この女は生れていたとしても、まだほんの幼児だったはずだが、とにかく、この歌を知っているとすることは、彼女が北回帰線に横断された島から来たことを、証明するものだった。

私は馨芳の顔から、フロント・グラスの中の闇に眼をうつし、そこに眼をこらしながら、記憶と

思考のさかいにあるものが自然に発展し、呼びさまされた若干の事実とむすびついて、ゆがめられた印象を匡正^{きやうせい}してくれるのを待った。こういう時、私のいつもやる方法なのだ。

「あの信号を右へ——」

私はほとんど無意識に、道を指示していた。視界はひろくなり、車は道路の真中に引かれた一本の白線に沿って進んだ。その白い線を車といっしょに、たぐり寄せながら、私は長いあいだの習慣から来る、なかば本能的な技術で、過去の記憶の中に道をつけて行った。